調査報告

怪異の類型と分布の時代変化に関する定量的分析の試み

Quantitative Analyses of Chronological Changes in Types and Spatial Patterns of Paranormal Events

鈴木 晃志郎・于 燕楠

SUZUKI Koshiro and U Yennan

(2019年11月13日受付 2019年12月16日受理)

今日の地理学において、幽霊や妖怪を含む怪異は、専ら民俗学的手法に依拠して検討されている。しかし隣接分野では、定量的な手法に基づいた知見が数多く存在し、客観性と厳密性を確保することによって学術的信頼性を高める試みが多くなされている。そこで本研究は富山県を対象とし、今からおよそ100年前（大正時代）の地元紙に連載された怪異譚と、ウェブ上に書き込まれた現代の怪異に関するうわさを内容分析し、(1) 怪異を類型化して出現頻度の有意差検定を行うとともに、(2) カーネル推定（検索半径8 km, 出力セルサイズ300 m）とラスタ演算による差分の算出により、怪異の出没地点の時代変化を解析した。その結果、現代の怪異は大正時代に比して種類が画一化され、可視性が失われ、生活圏から離れた山間部に退いていることが示された。

After a broad review of relevant fields of paranormal research, we analyzed how the ghost types and distribution patterns of haunted sites in Toyama have changed during the last 100 years. The targets consisted of paranormal sightings reported in 1) a newspaper series published in the 1910s and 2) information gathered in 2018 from online bulletin boards and ghost portal sites. The 114 sites were each georeferenced and their relative distribution trends were visualized by kernel density estimation and raster calculation (search radius, 8 km; output cell size, 300 m). The most noticeable difference was the withdrawal from haunted sites in urban areas. Text analyses also revealed that both the diversity of paranormal beings and frequency of interactions with them was reduced in the 2018 materials.

キーワード：幽霊、妖怪、密度推定、ラスタ演算、心霊スポット

Key words: ghosts, yōkai, kernel density estimation, raster calculation, haunted sites

Ⅰ 研究目的

本論文で扱う事象は、何らかの怪奇現象およびそれを引き起こす主体としての「怪異」¹⁾であり、その現象が生起する場所としての心霊スポットである。

怪奇現象が何であるにせよ、それらが現象となり得るには、人目に触れ認知されなければならない。ゆえに怪奇現象は高度に文化的であり、その舞台として共有される心霊スポット（怪異の発現地点）は、組織化され商業化された一般的な楽しみとしての娯楽からは逸脱した非日常的体験を提供する「疎外された娯楽（Alienated leisure）」（McCannell 1976: 57）の1つとして、社会の文化的機能の中に組み込まれているとみなしうる。その機能に対して社会が与える価値づけや役割期待の反映として心霊スポットの布置を捉え、その時代変化を通じて怪異に対する社会の側の変容を観察することは、文化地理学的にも意義があると考えられる。

後述するとおり、地理学において怪異は専ら民俗学や人文主義地理学を範とするエミクな方法に依拠して分析されてきた。しかし心理学や生理学などの隣接分野では、よりエティックな問題関心のもと、定量的な手法を用いて怪異を分析するための検討も多くなされている。地理学においても、民俗学的なアプローチにとどまらず、より広い問題関心に基づく定量的な研究手法が検討されて然るべきであろう。

怪異に関する学術研究は、それ自体が長く白眼視されてきたこともあって分野毎の蝸壺化が著しい。それらを横断的に展望した論文は管見の限り存在せず、これが学際的なイノベーションを起こしにくい状況をもたらしている。既存研究の方法論的限界を踏まえつつ新しい研究手法を検討する本研究の企図を遂げるにあたっては、学術界における怪異の相貌を努めて体系的に整理して課題と問題点を探る必要がある。そこで本論文はまず、文献研究を通じて内外の怪異に関する

学術研究をできるかぎり広範に展望することを第1の課題とする。次にそこから得られた知見を踏まえ、以下に示す手続きによって、怪異を可視化し数量化するための新たな分析手法の提示を試みることを第2の課題とする。

本論文における定量的分析は大きく2つのアプローチから構成される。第1のアプローチは、これまで民俗学で数多く為されてきた分類学的知見を参照しつつ分析対象から個々の怪異エピソードを抽出し、内容分析を行った上で数量化して有意差検定を行うことにより、約100年前と現在の怪異を比較分析する方法である。第2のアプローチは、GISによる怪異の空間的可視化である。以上2つの方法によって怪異の種類と心霊スポットの分布傾向が2つの時代でいかに異なっているかを定量的に明らかにし、その差異を通じて怪異と心霊スポットに与えられた社会的機能の時代変化を検討することをめざす。

II 怪異に関する学術研究

1. 心的過程としての怪異

今日、怪異はもっぱら擬似科学の題材であると考えられ、学術研究において怪異をテーマにした研究を行う際は、少なからぬ慎重さが求められる（木原 1987; 若杉 2014; 菊池 2017; Loch and Nzekwe 2011）。しかし、科学が怪異を含む擬似科学と袂を分かったのは19世紀以降と、その歴史は意外に浅い（三井 2012）。一柳（2009）は、明治維新後に欧米から輸入された学問としての心霊学（Psychical research）ないし心霊主義が、宗教的コードと結びついた従前の霊魂や魂の対概念として「霊的実在を科学的な場において議論するためのキー・ターム」（一柳 2009: 12）になっていったことを、当時の心霊学者の論考をもとに論証した。彼らの言説は、明治時代の前半までは、日本でも進歩的知識人の間で怪異を実証的に解明する動きがあったことを物語っている。中でも仏教哲学者の井上円了は、イギリスから心霊主義が日本に紹介される直前から「不思議研究会」を組織し、「妖怪学」を提唱した。井上はそれまで化物やもののけであった怪異に妖怪の名称を与え、さらに妖怪を（1）科学的に説明可能な妖怪と（2）科学の進歩に伴っていずれ説明可能になるで

あろう真怪に分類し、近代科学的合理主義に基づいて妖怪を含む怪異を批判的に検証した（井上 1898, 1900; 鈴木 2010; 小松 2006）。後述する超心理学（Parapsychology）も、日本では井上の妖怪学に源を発するとみて良い。

日本で科学が怪異を否定するようになったきっかけの一つとして良く知られているのは、明治末期に巻き起こった千里眼事件であった（長山 2005）。当時、遠隔透視が評判となっていた超能力者の御船千鶴子を熊本県立済々黌長だった井芹経平から紹介された今村新吉（京都帝国大学教授）と福来友吉（東京帝国大学助教）が、1909（明治42）年から翌年にかけてその真贋を科学的に解明するために実施した一連の実験をめぐる騒動である。実験は一部成功したものの全体としては不完全で、能力を疑われた彼女の服毒自殺によって幕が下ろされた。荒唐無稽にも思える遠隔透視能力の真贋を真面目に検証した今村と福来が変態心理学（Abnormal psychology: 後の精神医学や異常心理学）の流れを汲む研究者であったことは注記に値する。テレパシーや透視などの超能力を含む広義の怪異の真贋を、実験的な手続きに基づいて厳密に検証しようとした彼らの存在は、広義の怪異に科学のまなざしを向けることが明治期日本の学術界において許容されていたことを物語っている（中尾 2019）。

彼らの研究態度は、日本における超心理学の黎明でもあった。超心理学は、気功やテレパシー、透視など、広範な超常現象を科学的な手続きに則って検証する学問領域である。しかしながら千里眼事件の検証が不完全であったことに加え、事件後に数多現れた自称霊能者・超能力者のほとんどはオカルトブームの便乗者に過ぎず、ブームの終焉とともにオカルティズムを扱う研究は白眼視されていった。本論文の埒外ながら、超心理学それ自体も擬似科学であるとの批判にさらされており、日本の研究者数は現在も極めて少ない状況にある（Kokubo and Kasahara 2000）。一方、海外では超心理学的な関心に基づく学術研究もみられ、本論文の対象である怪異に関しては、それを感知した者（以下、受け手）の既有知識のなせるわざなのか、それとも周囲の環境要因の影響によるものかを、実験的な手続きに則って解き明かすことに関心が注がれている。

既有知識が心霊体験にもたらす影響を重視する立場

として知られているのが、曖昧で判断や評価の定まっていない出来事に対する反応の伝染性に注目したLange and Houran (1996)の一連の研究である。彼らのモデルは、逸脱行動が行為者の内的な属性によってではなく、周囲から行為者に付与されるレッテルによって定義づけられるとするハワード・ベッカーのラベリング理論を下敷きにしたもので、受け手が得体の知れない現象に直面した際、その解釈のために参照される既有知識（そこが心霊スポットであるという情報）が影響力をもつというものである。Lange and Houran (1997)は22名の被験者を2群に分け、周辺環境に注意を払いながら閉鎖された劇場を探索させる実験を行った。その際、一方にはそこが心霊スポットであることを予め伝えておき、もう一方には単に改修中であると説明した上で、受け手によって報告された怪奇現象の多寡を比較した。実験の結果、心霊スポットであると伝えられたグループの被験者は有意に高い頻度で怪奇現象を経験することが確かめられ、受け手の心霊体験における既有知識の影響が裏づけられた。類似の指摘は、怪奇現象への期待と催眠・心霊療法や輪廻転生などのニューエイジ運動への興味が受け手の怪奇現象の報告回数に関係することを、回帰分析によって示したHouran et al. (2002)、音声処理を加えたスピーチを受け手に聞かせ、目的を音声の明瞭さに関する実験だと伝えられた群と、超常現象による音声変化に関する実験だと伝えられた群との間でプライミング効果の差がみられるかを検証したNees and Phillips (2015)などでもなされている。

これに対し、462人の被験者を2群に分けて、イギリスのサリーとエディンバラの有名な心霊スポット2箇所経路探索実験をおこなったWiseman et al. (2003)は、受け手が怪奇現象を感知した地点とその場所の地磁気や照度との相関が高かったことを報告している。環境中の手がかりがもたらす影響については、いくつかの研究によって、温度やすきま風、霧、周波音、放射線などの環境中の手がかりが受け手の認知過程に影響することが示されている (Tandy 2000; Nickell 2001; Roll and Persinger 2001)。

それが既有知識にせよ環境中の手がかりにせよ、人は無秩序な視聴覚刺激を心的に解釈する過程で無意識に既知のパターンと摺り合わせ、意味あるものに認識

しようとする傾向がある。この種の知覚バイアスはパレイドリア (Pareidolia) と呼ばれ、霊的な体験のいくつかはパレイドリアによって説明可能であることが示されている (Brugger and Mohr 2008; Riekk et al. 2012; Nees and Phillips 2015)。人は環境中の僅かな変化を自然現象としてではなく得体の知れない敵のものと解釈することによって、いち早く危機回避して生き残ってきた。進化心理学者の中には怪異を、人類に種として備わった力としての「過覚醒 (Hypervigilance)」の産物とみなす者もいる (Bering 2006)。

このように、超心理学的研究では内省報告としての怪奇現象の存在は受容した上で、定量的な手法を用いてその成因やメカニズムを検証する手続きがとられるのに対し、異常心理学・精神病理学的なアプローチを取る研究では、怪奇現象が妄想や幻覚など精神病理の産物であることを前提とし、定性的な手法に基づいてその原因やメカニズムを解明しようとするアプローチがとられる。

癲癇をもつ13歳のイギリス人少女が幻視とボルターガイスト現象を訴えたのを契機に、周囲の人々へ怪奇現象が伝播していく過程を報告したMcHarg (1973)は、これを社会的妄想と結論づけた。同様の指摘は、これを大衆文化的ヒステリーと呼んだShowalter (1997)によってもなされている。外傷学ないし災害医学では、戦争や災害、家庭内暴力を受けた人々の心的外傷後ストレス障害の症状として、しばしば霊的な幻覚が現れることが報告されている (Aciksoz 2015; Jalal 2016; Lieberman 2007)。また、レビー小体型認知症に罹患した高齢者の中にも、しばしば亡くなった家族が家の中にいるといった幻視の症状を示す例がみられる (池田 2009)。これと類似した神経学的所見にFoP (Feeling of a presence: 何者かが近くにいると感じる錯覚) がある。Blanke et al. (2014)は、マスター／スレイヴ方式で動かすロボット装置を作成して健常者に擬似的なFoPを体験させる実験を行い、FoPが側頭頭頂皮質、島皮質、特に前頭頭頂皮質異常に関連した感覚運動障害により、自らの身体感覚や運動を通じて得られる信号と自意識との錯誤が引き起こされることで生じると指摘している。

一方、同じ怪奇現象を事件や事故、自然災害後の地域社会における死の受容の観点から捉えようとする研

究も多い。先ごろ、東日本大震災後に罹災者と遭遇した石巻・気仙沼市内のタクシー運転手の心霊体験を克明に記述した工藤（2016）の報告が話題を呼んだ。彼女が報告した事象は「死後のコミュニケーション（ADC: After-death communications）」と呼ばれるものの一種で、関わりのある人を失った人々がその死を受容し、トラウマを乗り越えていく過程で経験する新しいタイプの心霊現象とされる（Kwilecki 2009, 2011）。この概念を提唱したGuggenheim and Guggenheim（1995: 16）は、ADCを「亡くなった家族や友人から直接かつ自発的にコンタクトされた時のスピリチュアルな経験」とし、声や姿、匂いや触られた感覚のほか、そこにいる感覚、ものが落下する現象など12の類型からなるとした。また彼らは同様の喪失体験をした全米2,000人にインタビュー調査を行い、全体の20%にADCがみられたことを報告している。

以上のように、心的過程としての怪異を扱う研究は、感知された怪奇現象の成因やメカニズムを解明しようとするグループと、主に治療の対象としての幻覚や妄想としての怪異を記述するグループに大別でき、分析手法としても定量的な手法と定性的な手法の両方が確立されている。

2. 社会・文化の表象としての怪異

心的過程を取り扱う心理学的なアプローチと並んで、既存研究をなすもう1つの主要な方向性は、社会や文化の慣習や価値観などが表象されたものとして怪異を捉えようとするアプローチである。怪異と心霊スポットに与えられた社会的・文化的な役割や意味の時代変化を定量的に捉えようとする本研究もこのアプローチに属する。この領域の研究は多岐にわたるため、本論文が目的とする怪異の定義と分類法、および怪異の分布傾向に関する知見を中心に概観しておきたい²⁾。

科学がオカルティズムと対峙した千里眼事件とほぼ時を同じくする1910（明治43）年、民俗学者の柳田國男が『遠野物語』を上梓した（柳田・佐々木 1910）。遠野物語は、岩手県遠野地方の民話蒐集家だった佐々木喜善の口述する逸話や伝承を柳田が筆記し、これに独自の取材を加える形でまとめられた説話集である。同書には、座敷童子や雪女などの妖怪に纏わる怪談、お白様や金精神などの土着信仰、神隠しや臨死体験に

まつわるエピソード、行事や風習の記録などが数多く含まれていた。同書は文学作品としての評価もなされる一方、農商務省の官吏として赴いた椎葉村で民間説話や伝承の重要性に気づき、後年は日本民俗学会長にまでなった柳田の初期代表作のひとつとして、日本における民俗学の先鞭をつけた名著とされている（橋内 2011）。千里眼事件を境に学術界の怪異に対する視線が冷ややかなものへと変わりつつあるその刹那、柳田の著した『遠野物語』は、怪異に民俗学的な研究素材の一つとしての新たな学術的価値をもたらした。

非西欧圏の怪異に関する文化人類学的研究は20世紀前半から海外でも数多くなされてきたが、祭祀や宗教儀礼を直接観察する手法が主にとられてきた（Gluckmann 1937; Evans-Pritchard 1950; Beattie 1964）。大塚（1988）の表現を借りるならそれは、「無文字」社会である未開人の社会を研究する科学として出発した人類学思想態度のあらわれでもあった。これに対し、日本は非欧米圏の中で成人男性の識字率が江戸期でも40～50%程度（斉藤 2012）と際だって高く、民製の史料も豊富に残存し、文字・絵画資料に基づく文化史的な検討がし易い環境であった。怪異を独立した研究対象とみなし通時的な枠組みに沿って分析するアプローチが日本で独自の発展を遂げることができた理由には、こうした要因も関与していたと考えられる。この領域の研究は、資史料を通じて文化史的な視角から怪異の分類学を志向するアプローチと、怪異の分布特性や場所性に注目し、生活世界から異世界へと連なる空間構造を概念化しようとするアプローチに大別できる。本論文では便宜的に前者を分類学的アプローチ、後者を空間論的アプローチと呼ぶ。

日本での分類学的アプローチはその性格上、江戸期以前の史料の内容分析が中心となる文化史的な領域であり、多くの類書も刊行されて研究領域としての体系化が進んでいる。

柳田以来の絵画や文書を整理し、怪異の分類学的考察を行った小松（2006）は、日本文化の基底にあるアニミズム的観念が妖怪の種類を増加させた指摘している。また怪異の類同的な概念としての「もののけ」に注目した宮田（2001）は、それを精霊や魂の状態にある「物の気」と、形を示して祟りなどの自己表現をする「物の怪」の合成概念とした。絵巻や草紙などの

史料を例示しつつ妖怪名鑑を編集した小松（1990）も、妖怪存在と妖怪現象に区別して怪異の説明を試みている。こうした日本の妖怪研究における分類学的アプローチは、妖怪がその普及過程において博物学的な志向に基づいて紹介されていたことと無縁ではない。香川（2003）は、江戸中期に相次いで出版された『百怪図鑑』（1737年）や『画図百鬼夜行』（1776年）などの「妖怪図鑑」が、当時最先端の科学であった本草学のパロディとして分類学的に書かれたことに注目し、妖怪が当初から博物学的に扱われていたことの文化的意義を強調している。妖怪は江戸期以降、こうした図鑑を通じて庶民の娯楽と化し、双六やカルタ、凧などの玩具に広く登場、流通していった。

このうち、いくつかの代表的な妖怪については近年、主に日中比較を通じてイメージ形成の過程を解明しようとする研究がなされている。その理由は、中国の民俗学が、明治期から大正期にかけての日本の民俗学の影響下に発展してきたことと無縁ではない。

20世紀初頭、西欧に倣って近代化が推し進められた中国では、古い迷信や因習を打破するための手段の一つとして井上円了の妖怪学がいち早く紹介された（王 2015）。屠正立の『尋常小学妖怪学教科書』（1902年）や、のち北京大学総長にもなった蔡元培の『妖怪学講義』（1906年）などの訳本も相次いで出版され、民俗学者の江紹元は「迷信研究」という講義を1920年代後半に中山大学と北京大学で相次いで開講、講義資料を再編した『中国礼俗迷信』（江 1989）も出版されるなど、日本の民俗学の流れを汲んだ怪異の研究がなされてきた（王 2013; 子安 2006）。ただ、日本で妖怪が人口に膾炙するのはせいぜい江戸期以降で、六朝期から『山海經』などの「志怪」が数多く著されてきた中国の方が遙かに歴史は古い（高橋 1999）。老虎外婆や老虎精のように人に化けて近づき食おうとする中国の半人半獣の妖怪が日本で山姥からの逃走譚に置き換えられていったとする飯倉（1993）、中国生まれの獺怪異譚が日本に輸入されたのち河童に変容していく過程を論じた増子（2009, 2010, 2011）の一連の研究、19世紀以降の錦絵の中で河童イメージの統合が進められていく過程を報告した小澤（2011）、頭部が飛行する中国の「飛頭蛮」が日本に輸入されて頸部を伸ばす轆轤首になったことを述べた横山（2004）などの事例が

示す、近年の日中間の比較文化的研究の充実も、こうした認識のもとでなされるようになったものと考えられる。

以上を踏まえると、怪異は、幽霊や妖怪、動物霊や付喪神のように形を帯びて見えるもの以外にも、憑きものや祟り、異音や特異な自然現象など、行為主体の姿を直接見るができないものまでを包含する概念である。特に、歴史的題材としての怪異に対する定量的な分析を行うにあたっては、精霊としての物の気によると解釈される怪奇現象を幅広く含めた分析枠組みを構築する必要がある。

心的過程をめぐる研究とは対照的に、これら妖怪研究のほとんどは図像や文の解釈を中心とする定性的な手法に依拠し、個別の史料を例証的にとりあげる形で説明が加えられる。しかしながら、個々の怪異の分類基準について研究者間に解釈上の合意が確立しているのかどうかは曖昧である。史料の解釈もしばしば場当たり的で、根拠や説得力の乏しいものが含まれることも稀ではなく、方法論において課題を残している。それでも、大正時代の怪異を現代のそれと比較検討する本研究の企図において、妖怪の分類法に関する間主観的な合意を得ることを可能にしている点でこれらの研究は有益である。

アプローチが定性的であることと並んで、日本の妖怪研究が有するもう1つの大きな特徴に、日本民俗学の影響が及ばない国々、特にキリスト教圏である欧米の怪異研究の中での相対化をほとんど試みた様子がないことが挙げられる。怪異に関する研究が日本や中国などのアジア圏だけのものではないことは記しておくなければならない（王 2015; 廣田 2016）。日本の妖怪研究の位置づけを明確化するためにも、海外における怪異の研究との相違について言及しておきたい。

Wittkower（1942）は、異化された非キリスト教世界に対するヨーロッパ社会の畏怖を象徴するものとして、古代ギリシャから一貫して用いられてきた「怪物（Monster）」に注目し、特にインド地域の怪物に関する豊富な史料を挙げてこれを論証している。この研究が示すように、欧米の怪異研究を特徴づけているのは、日本の妖怪と類同的な位置づけにある怪物が、キリスト教的価値規範と分かちがたく結びつけられている点である。

Walton et al. (1993) は、ルネサンス期の書物进行分析し、ルターやパレラ神学者が先天性奇形を終末の予兆と捉え、怪物の意匠で描いていたことを指摘した。かつて成長障害や知能障害をもたらす病であった先天性甲状腺機能低下症（クレチン症）の語源は、スイスでこの疾患をもつ子を神の遣いと考え、現在のクリスチャンの語源にあたる Cretin を命名していたことに由来するという。論文中でこのエピソードに触れた Eberly (1988) は、イギリスの妖精伝承と先天性疾患との結びつきについてコーパス分析を行った。それら妖精伝承の多くはシャイで心優しく人里離れた洞穴に隠れ住む怪物のイメージを共有している。この点に注目した著者は、地域差こそあれ先天性障害児が妖精による「すり替え (Changeling)」や「交雑 (Hybrids)」によって誕生したと考えられ、その迷信が家族や地域における先天性障害児の社会的受容に際して一定の機能を果たしていたのではないかと指摘している。

こうした指摘は、ゴッフマン (2001) の提示したスティグマの概念を援用することによって理解可能である。スティグマの語源はギリシャ語で奴隷や犯罪者などに刻される「肉体上の^{しるし}徴」を意味し、異なっていることを示す、望ましくない種類の属性と定義される。敷衍すると、先天性疾患による外的な徴をもつ者に対する畏怖や忌避の感情が投影されたものとして伝承や説話を解釈する西欧の怪異研究は、端的には「徴づけられた者」の物語としての怪異研究といえる。

怪異研究におけるこうした社会批判のまなざしは、アメリカの小説や映画などに登場する怪物（フランケンシュタインやエイリアン、ゾンビなど）を、アメリカ開拓史の成立過程で異化されてきた先住民や女性、黒人奴隷たち、異教徒への畏怖が擬人化されたものとみなして批判的に分析した Poole (2011) や、英コーンウォール地方の怪異であったトミーノッカーズの説話がアメリカへ伝播する過程でユダヤ人炭坑夫の靈魂であるという設定を失い変容していったとする James (1992)、西欧の植民地支配によって先住民の宗教的世界観がどのように退縮していったかを検討した Clarke (2007) の研究などにも共通してみられる傾向である。

キリスト教はその伝播の過程で、地域の信仰に部分的に適応しつつも先住民たちの信仰を邪教化し、異教徒（罪人）を作り出すことによって教化を成し遂げて

きた (Robbins 1998; Zehner 2005)。一義的な創造主あるいは三位一体の神が絶対的な存在であるキリスト教世界において、怪物は基本的に神（や悪魔）の創造物 Creature にすぎず、肉体が変身することがあっても怪物そのものが^{へんげ}変化するわけではない。これとは対照的に、アジアでは神と霊とを必ずしも区別しない怪異観が広く受け入れられている。無知蒙昧な主人公を通して中国社会を啓発しようとした『阿Q正伝』で知られる魯迅は、中国小説の発展過程を論じた『中国小説史略』を著した (植松 2007)。この中で魯迅は、中国では伝統的に神と鬼（霊）を区別せず、「而人鬼亦得為神祇（人鬼もまた神祇になり得る）」 (魯 2014: 111-112) としている。実際、フィリピンではキリスト教社会でありながら先住民の間でアスマラ（吸血鬼であり内臓を吸い、獣人でもある妖怪）が広く信奉されている (Ramos 1990)。また台湾や中国の少数民族の中にはキリスト教による教化を受けてなお、神 (God) と魔物 (Diablo) を区別せず Utux と呼ぶ信仰も残存する (李 2001)。日本の妖怪もまた、神か悪魔かの西洋的な二元論の枠組みには収まらず、動物や古道具さえも魂をもち自在に^{へんげ}変化する。こうした存在を一般名詞で呼ぶ文化は日本独自のもので、これが日本で分類学としての妖怪研究が発展を遂げた大きな理由の1つであろう。

ところで、ここまで述べてきた妖怪や怪物の研究は、ほとんどが歴史的資料を用いた社会・文化史的なまなざしの下でなされている。これらは100年前の怪異の分類には有効であろう。しかし現代の怪異は、「近代状況のなかで生成されるフォークロア」 (重信 2013: 104) であり、口コミやマスメディア、ウェブサイトやSNSを介した流言飛語ないしネットロアであることが一般的である (Hajduk-Nijakowska 2015)。二者は情報伝達媒体が異なるだけで、いずれも民間伝承や説話の1つである。ただ日本においては、妖怪研究に代表される江戸期以前の怪異に関する研究とそれ以降の怪異に関する研究の間に連続性が希薄なため、現代の怪異について検討するには、妖怪研究とは別の枠組みを踏まえて行う必要がある。その代表的なものに「うわさ」に関する研究がある。

うわさに関する古典的な研究としては、第二次大戦中に流れた流言飛語を内容分析し、それらが憎悪や敵

意、恐怖、願望に基づくものであることを指摘した Knapp (1944) がある。その後、コミュニケーションとしてのうわさは社会心理学を中心に研究が進み、個人の不安感、内容ないし状況の曖昧さ (Schachter and Burdick 1955; Rosnow 1988, 1991; Kimmel and Keefer 1991; Walker and Blaine 1991) や、内容のもっともらしさ (Anthony and Gibbins 1995; Pezzo and Beckstead 2006) が伝播に関わる要因であることが示された。

川上 (1997) は、うわさを内容や機能に基づいて (1) 事件や事故直後などの特殊な状況下で流れる「流言」、(2) 日常生活圏内で、身近な人々と交わされる「ゴシップ」、(3) 内容そのものに娯楽的要素があり、繰り返し消費される「都市伝説」に分類した。このうち、現代の怪異に関する流言飛語は都市伝説の一部をなしている。

都市伝説の研究は、1969年にフランスの地方都市で流布したうわさ話を非構造化インタビューに基づいて収集・分析したモラン (1980) に遡ることができる。ブティックの試着室に入った女性が忽然と消え、そのまま拉致されて売春窟に売り飛ばされるというそのうわさが一気に拡散した理由としてモランは、当初思春期の少女たちの漫然とした性への憧れから始まったうわさに「店主がユダヤ人である」という民族差別的な情報が加えられ現実味を帯びた脅威と認識されたことが関与しているとした。

怪異に関する都市伝説の研究として特に知られているのが、アメリカの民俗学者ブルンヴァンによる一連の研究である (ブルンヴァン 1988, 1990)。ブルンヴァンは民間説話の下位概念として都市伝説をおき、新聞記事や雑誌の内容分析、インタビュー調査などを併用して、現実味を帯びた話として流布されている都市伝説の生成・消費過程を分析した。彼の著作は、それまで一定の社会関係や空間的範囲、文化、習俗との関わりの中で論じられていた怪異が、口承による情報伝達という形でローカルな文脈を離れて消費されることを示した点で高く評価される。こうした怪異と都市伝説との関わりは、例えば女性週刊誌の内容分析を通じて「口裂け女」が日本の「く美」を要求するディスカールに対する不安、あるいはそうしたものに対する不安定なレスポンスが体现化された「者」であると解釈したフォスター (2003: 649) や、1950年代に登場した

綿毛のような妖怪「ケサランバサラン」が、その後メディアに露出することで広く認知された結果「日常から、もしくは歴史文献の中からまた新たな報告がなされ、新資料が追加され」(飯倉 2006: 132) ていき、名づけによって妖怪現象が再発見されたと指摘する飯倉などの、近年の研究でより明瞭に表れている。

ただし、上記の例外を除くと日本で怪異に関する都市伝説の内容分析を試みる研究は限られており、農村社会の都市伝説は動物霊が関与するものが多いことや、欧米に比して個々のスポットのもつ物語性や場所性が強調されることなどを明らかにした中国における都市伝説研究の後塵を拝している (魏・張 2011; 黄 2014)。これら新しいタイプの怪異も、怪異の時代変化を扱う本研究においては重要な位置を占めており、目を配る必要がある。

こうした怪異が現象として成立するには、それらが人と邂逅する必要がある。舞台としての場所 (心霊スポット) が必要である。地理学的な怪異の研究をなすにあたって、心霊スポットの特性が大きな意味をもつことはいうまでもない。こうした怪異の地理学的特性に注目するアプローチが、空間論的アプローチである。心霊ツアーが商業的に成立しているヨーロッパでは、案内者による解説や仮装、演出などの分析を通じて場の創出や消費過程を解明しようとする演劇論的な立場からも一定の蓄積がなされている (e.g. Holloway 2010; Light 2009; Inglis and Holmes 2003; Thompson 2010)。ただし、これらの研究では主にその場所性が問題とされ、本論文が扱う空間分布傾向についての関心は薄い。

空間論的アプローチをとる研究者にとって最も大きな理論的支柱となってきたのは、境界理論と呼ばれるタブー言語に関する社会人類学の知見であろう (Leach 1964; Douglas 1966)。人間は幼児期以降、天と地、大人と子供、国内と国外のように言語の獲得を通じて命名による世界の概念的な区分法を習得する。しかし実際には二者の境界は明瞭でなく、須らく曖昧な中間領域を内包している。この領域に属するものはその曖昧さゆえ社会に不安定さをもたらすタブー視される一方、境界線を行き来する特殊な能力と神秘性を有するとみなされ、畏怖の対象ともなる (石川ほか 1985; 梅原・中西 1996)。Leachの例示した聖母マリアの処女懐胎や半獣神と同様に、怪異も二者 (生と死、内と外、

あの世とこの世、人間と神、平地と山、昼と夜)の中間領域に属するがゆえにタブー視や畏怖の対象となる。空間論的アプローチをとる研究者はこの境界性に注目し、生活圏となる集落の内側と、その外側に広がる異世界との間に設定された境界の場所性や意味に注目し、怪異を拠り所にその説明を試みようとする。

1910(明治43)年に発足した「郷土会」の幹事となった柳田から会員の小田内通敏、牧口常三郎、正木助次郎らを経由して、民俗学のアプローチと方法論は早くから地理学界へも導入された(千葉1963;野澤2009)。1970年代に入って場所性をめぐる人文主義地理学が紹介されると、怪異に対する地理学的な研究もみられるようになった。川を跨いで兩岸を結ぶ橋の機能的特性に注目し、「阿蘇の赤橋」が心霊現象の噂の拡がりから自殺の名所として成立していく過程を検討した福西(2019)、江戸期の罪人引き廻し伝承をもとに、旧居住域の南端に位置する松原通が、新居住域の東西の洛外に位置する刑場への死出の道の境界として機能していると指摘した土居(1996)はいずれも、境界理論の間接的な影響下に、空間論的な視座から場所イメージの解釈を試みた例といえる。

怪異の研究の枠内で分布傾向の経験的な調査を行った例としては、江戸期の怪奇・霊異譚から空間スケール別の「不思議の場所」を抽出して地図化し、江戸東北部への偏在を指摘した内田(1990)が先駆的であろう。異界の要素が江戸の空間構造とどのように関わっているのかを検討し、江戸をとりまく環帯上に寺社仏閣を配する空間構造が見出されたと主張する村田・渡辺(1992)や、徳島県石井町の首切れ馬伝承を地籍図上にプロットし、その出現地点が村境や小字界に集中していたとした佐々木(2011)も、内田のそれと近似した企図のもとに怪異やそれにまつわる施設の空間分布を検討しようとした例である。大学の授業の一環として高岡(2004)が学生8人と作成した「高知市異界マップ」も、怪異の分布傾向の分析を試みた。そこでは、資料や聞き取りから高知市内の妖怪・幽霊の出没地を地図化した結果、妖怪が周囲の生態系や生物相に合わせて河童や蝦蟇、狐などに化ける一方、幽霊は市街地に出現する傾向が強いことが示されている。山間地や奄美大島の龍郷町を事例に、妖怪出没地の地理的特性を分析した松井・高橋(2011)も、出没

地が集落縁辺部や隣接集落の境界、聖地の3つに類型化でき、特に集落の縁辺部に多く出没しているとしている。これらの研究は、生活世界と異世界の境界は、地理空間上で観測可能であることを強く示唆する。しかしながら、いずれの研究も紙地図上に地点をマッピングする素朴な手法がとられているに過ぎない。この方法では定量的な比較分析が困難なため、時代変化の比較解析にまでは至っていない。本論文が導入を企図するGISはこうした空間分析の可能性を飛躍的に高めると考えられる。

3. 怪異の地理学における定量的分析の可能性

ここまで可能な限り広範に、過去になされてきた怪異の研究を概観してきた。その結果、怪異の研究は受け手の側の心的過程を説明するアプローチと、社会的・文化的表象としての怪異を分析するアプローチに大別されることが明らかになった。また後者のアプローチはさらに、文化史的な関心に基づく妖怪や怪物の研究と、現代の怪異に関する都市伝説の研究に大別できた。前者のアプローチには、実験的な手続きに基づく定量的な分析方法と臨床的な知見をもとにした定性的な分析方法が確立しているのに対し、後者のアプローチの多くは民俗学ないし人文主義地理学の流れを汲む定性的な手法とエミックなアプローチに依拠しており、江戸期以前の怪異と現代の怪異研究との間の時代変化を扱う研究はほとんど見られないことも分かった。

定性的な手法にのみ依拠する傾向は、日本で独自の発展をみた妖怪の研究において特に顕著である。怪異は擬似科学との関わりが深く、それ自体見ることも掴むこともできない。エティックで定量的な分析方法を導入することによってこうした事象を扱う研究の客観性や再現性を高めることは、ともすれば科学コミュニティにおいて白眼視されがちな怪異研究の可能性を広げることに繋がるであろう。

そこで本研究は、民俗学における分類学的知見を参照しつつ、約100年前と現在の資料から怪異に関するエピソードを抽出し数量化して有意差検定を行うとともに、上記2時点における怪異の分布傾向をGISによって比較解析することを通じて、怪異研究における定量的分析の可能性を探る。分析対象は富山県である。富

山県は、県北部の富山湾を取り巻く平野上に、ごく平均的な地方中核都市である富山と高岡、氷見、魚津などの市街地が点在しているが、これらを県東部、西部、南部の山地から伸びる傾斜がすり鉢状に包んでいる。市街地からみて三方を同じように山地で囲まれた富山の地勢が、GISを用いた空間解析結果の観察に極めて適していることから、研究対象地に選定した。

III 研究方法

本論文の分析対象は、今から100年ほど前に富山県内の新聞上で組まれた怪談に関する連載記事（大正群）と、インターネット上に流布している富山に関するエピソード（現代群）の2群であり、いずれも富山県内が対象地となっている。

2015年、桂書房から復刻された『越中怪談紀行』は、高岡新報社が1914（大正3）年に連載した「越中怪談」と、1910（明治43）年に富山日報が連載した「秋の夜長物語」の2つを再編し併載したものである。県内の主要な怪談が新聞社によって連載記事として集められている上、復刻の際に桂書房の編集部によって当時の絵地図や旧版地形図を用いた位置情報の調査が加えられている。情報伝達手段の限られていた当時、恐らく最も網羅的な心霊スポットの情報源として、代表性があるものと判断した。同書には55の記事が採録されているが、2つ以上のエピソードを含む記事が複数あり、それらを個別に集計した結果、72件のサンプルが抽出された。

比較対象となる現代群のサンプルは、2018年12月に怪異に関するインターネット上の情報をサーチエンジンで検索する方法で取得した。検索手順は、まず検索語に「富山」と心霊、幽霊、オカルト、都市伝説、怖、お化け、妖怪、噂の各語を併記して最初の検索を行い、その検索語の中に含まれる個別の怪異についてさらに検索する方法で追加情報を得る手続きをとった。例えば、富山県氷見市余川の市谷橋には、体長30 cmの煙管を銜えた老人が出没し、通行人に笑いかけるといふ怪談が報告されており、この情報からは「市谷橋」、「一尺爺」、「妖怪」の3つの要素を抽出できる。この場合は、怪異の主体である妖怪と住所情報、出没地としての橋の情報を得られるほか、新たに「市谷橋」、

「一尺爺」の固有名詞を得られるため、これをキーワードにしてさらにスノーボール・サンプリングを実施することが可能となる。

以上の方法で得た全ての検索結果から重複や転載、ノイズ情報（書籍や霊能者の宣伝など）、言及頻度が2件未満で共有されているとは見なせない情報をスクリーニングして順次除外した。その結果、280件のウェブ上の情報が現代群のサンプルとして抽出された。

次に、民俗学的な知見に基づきながら、それらの地点に出現する怪異をタイプ分けし、怪異と受け手の側とのコミュニケーションについても、相互作用の有無を分類した。相互作用とは、怪異に対してただ受け身の態度に終始するか、それとも受け手の側からも働きかけを行っているかを基準としている。夜道で妖怪に出会った受け手の侍がこれを袈裟懸けに切ったり、タクシー運転手が幽霊を拾って賃走した場合などがこれに該当する。

妖怪と幽霊の最も端的な違いは、妖怪が人への働きかけを行うこと（Ostermiller 2017）、幽霊がその姿を変えないのに対し、妖怪は変化自在であり、その一方で識別可能な特徴を備えていることにある（Blacker 2002; 小松 1990）。高岡は幽霊が妖怪の一範疇であり、当初は区別されていなかったとしつつ「可視的な死者の霊的存在であり、それも生前の姿で出現する」（高岡 2016: 6）のが幽霊であり、産褥で死んだ女が産女という一般名詞を冠されることで妖怪になるように、「死者を特定できる場合は「幽霊」だが、死者の名前が忘却されたり、話の中から抹消される」ことで「妖怪にカテゴライズされてしまう」（同: 47）としている。こうした指摘はカワウソが河童に結び付けられて妖怪化する過程を分析した増子（2009）の論考や、「造形化された」という表現で同様の指摘をしている小松（2006）などにもみられる。

これらの知見を踏まえ、本論文では（1）資料中で幽霊または妖怪の名称が冠されている場合はこれに従う、（2）名称が与えられていない場合は人型の可視的な怪異を幽霊とし、妖怪としての一般名詞をもつか、変化するものを妖怪に大別した。さらに既存の研究に即し、妖怪も（1）資料中で名称が与えられている場合はその分類に従う、（2）与えられていない場合は既存の研究をもとに最も当てはまる呼称を探して分類し

た。また変化^{へんげ}した場合は、その前後をそれぞれカウントした。また、貉や狐などの動物霊と天狗や河童などの妖怪とは区別して集計するほか、山人や不良、ホームレスなどの異人³⁾、神、火の玉・生首は個別に集計した。上記の分類のいずれにも当てはまらない怪異には、主体の属性が明らかでなく、固有名詞をもたないものが含まれる。音や声、身体上の不具合、機器の不具合、夢や幻覚、転生などがその例である。以上の結果、エピソードに出現した全ての怪異を、(1) 幽霊、(2) 妖怪、(3) 動物霊、(4) 神、(5) 異人、(6) 火の玉・首、(7) その他の怪異に類型化できた。

以上の分類基準に従って対象となった全ての怪談や都市伝説を内容分析し、怪異の可視性（怪異の主体が受け手に見えているか）、性別の視認性（性別が特定可能かどうか）、変化^{へんげ}（姿形を変えるかどうか）、相互作用（受け手が怪異の主体に対して能動的な働きかけを行っているかどうか）の4点から、それぞれYesの場合を1、Noの場合を0としてダミー変数化した。性別の判定に際しては、「ホームレス」、「作業員」、「侍」、「武士」、「軍人」、「兵士」、「日本軍」、「ヤクザ」、「暴力団員」、「不良」、「天狗」、「出家」、「僧」、「入道」については社会通念上男性と判定した。また声のみで主体が見えない場合も、受け手が「男」、「女」と記している場合は1にカウントした。同じく、各エピソードに出現する怪異を上記7つのタイプと照合し、出現した場合は1、出現しなかった場合は0としてダミー変数化した。分類不能の場合はその他にする方法をとった。また、怪異に関するエピソードは語り手を通じて伝えられるためその話法にも注目し、直接経験として一人称で語られているか、都市伝説の研究でいう「友人の友人（Friend of a friend）」のように受け手が追跡可能な二人称で語られている場合は「実体験」、受け手が明示されない風聞の場合は「伝聞」として集計した。以上の方法で数値化された大正群と現代群の有意差をマン・ホイットニーのU検定（順位和検定）により検討した。

怪異の出没地点を特定するにあたっては、本文中の記述や風景写真、他サイトの掲載情報のほか、今昔マップ on the Web による新旧版地形図上の位置の照合と、Google Map の航空写真上にカーソルを置く方法とを適宜活用して座標値を取得し、点データ化した。

『越中怪談紀行』の掲載記事は編集部によってエピソードごと、或いは地点ごとにまとめられており、エピソードの中に複数の怪異が紹介されている例もある。各々の怪異の出現地点（心霊スポット）は20 m程度の誤差で特定可能なレベルのものが多く、中には集落単位でしか位置を測位できない地点や形状的に中心点を代表点とせざるを得ない地点（トンネルや橋の上など）もあった。本研究では、既存の空間論的アプローチの研究に倣って県内全域の分布傾向を議論する方法をとるため、一集落の範囲内に収まる程度の誤差は許容範囲とし、旧版地形図等で集落の特定が可能な場合は集落の中心地点の座標値を計測することで代表させる措置をとった。それでも位置情報を取得することが難しい事例としては、神通川で漁師が乱雲の中に掴みあげられていく女性を見たとする「鬼に掴まれた女」（高岡新報 2015: 28-29）のような例がある。このように位置情報の特定が困難なものを除いた全地点をジオリファレンスしてGISに取り込んだ。結果、大正群は62地点が空間解析の対象となった。怪異が受け手に随伴するなどして移動した場合は、最初に出没した地点の位置情報を記録することとし、これが困難な場合は出没から消滅までの過程で最も正確に位置情報の取れる地点の経緯度座標値を記録した。

一方、現代群で抽出された280件の多くは同じ心霊スポットに対する複数の書き込みが重複したものであり、最も重複の多い牛首トンネルには15件の重複がみられる。GISによる空間解析は出没地点の解析であるため、これら書き込み情報の重複を削除したところ、合計52地点が分析の対象となった。

以上の手続きで得られた大正群と現代群の点データをもとに、ArcGIS 10.3を用いてカーネル密度推定（検索半径8 km, 出力セルサイズ300 m）およびラスタ演算による差分の解析を行い、二者の相対的な分布傾向の差異を可視化した。

IV 結果と考察

1. 結果

図1は、現代の心霊スポットの密度分布と大正時代の出没地点の密度分布の差分を、ラスタ演算により検討したものである。県の輪郭と地勢をおおまかに把握

図1 怪異の出没地点のラスタ演算結果（現代の密度分布と大正時代の密度分布の差分）および現代群と大正群の標準偏差楕円

Figure 1 Raster calculation results of haunted sites derived from kernel densities together with the standard deviational ellipses in the 2018 and 1910/1914 haunted site datasets.

しやすくするため、富山県内のみ国土数値情報が提供する「森林地帯」のデータを灰色に着色して透過処理し、挿入してある。ラスタ演算の出力結果は、青に近い色ほど現代の値が相対的に卓越していることを示し、赤に偏倚している場所ほど大正側の値が相対的に高いことを示している。概ね図の中央付近にみられる赤の濃い2つの区域は、東側が富山市、西側が高岡市や射水市の市街地に相当し、県北西部に現れた大きな

赤方偏倚（氷見市街）とともに、大正時代の値の高まりが人口集中地区およびその周辺の平野部に集中していることを示している。対照的に、現代の値が卓越するのは、高岡と氷見を隔てる二上山（274 m）を中心とする低山帯から石川県津幡町の石川県立森林公園にかけての森林部、富山市と砺波市を隔てる古洞の森、富山市南部の大山布目周辺、魚津市南部の鹿熊周辺、および黒部市と魚津市を隔てる黒部市三ヶ山の丘陵地

帯、朝日町（県北東部）東側の丘陵など、ほとんど全てが市街地近郊の丘陵や山間部に偏っていることが明らかになった。

また、大正群、現代群それぞれの点分布をもとに、分布指向性分析によって全体の約67%（1標準偏差）が含まれるような標準偏差楕円を描画したところ、氷見市街のある北西方向を除き、大正群の標準偏差楕円は現代群のそれに比して海に向かって開けた平野部への凝集が顕著で、相対的に県東南西部をとりまく森林地帯への拡大傾向をみせる現代群とは異なる傾向を示している。このことから、心霊スポットの分布傾向における大正時代から現代に至るまでの最も顕著な変化は、市街地や平野部からの心霊スポットの撤退傾向にあると考えられる。

次に、大正時代と現代の怪異エピソードの内容分析結果について検討する。表1は、エピソード中に登場する怪異の特性や類型、出没地点に加え、怪異が登場しないエピソードにおいて受け手の畏怖の念を喚起すべく含まれる場所の履歴（死者や行方不明者、過去の忌まわしい出来事などの情報）の有無をダミー変数化したうえで、U検定による2群の有意差検定の結果を示したものである。なお有意差が検出された項目については、値の高い群のセルに着色してある。

「語り手の話法」は、エピソードとしての怪異譚が話形として受け手の直接経験の形を取るか、それとも不確かな伝聞として語られるのかを検討したものである。いずれも1%水準で有意差が検出され、大正時代の語りは直接経験を、現代の語りは伝聞の形を取る傾向があることが確かめられた。筆者らの研究は妖怪研究と都市伝説の研究とを連続的なものとする立場をとっている。この立場からみると、顔見知りの経験談として語られることが少なくなり、出所不明の風聞が支配する現代の怪異譚は、都市的な生活様式をとる人々の増加に伴って形作られる社会関係の多くが「弱い紐帯」（Granovetter 1973）で結ばれるようになった状況を間接的に示しているように思われる。ただし、前提として大正群と現代群の資料の性格は異なっているため、この推論には留意が必要である。

「怪異の特性」は、出没した怪異が視認可能であるか、性別が認識可能な存在であるか、エピソード中に姿形を変えるか、怪異との相互作用は可能かの4項目

表1 大正群と現代群のエピソードに含まれる要素の群間有意差検定結果

Table 1 Mann-Whitney U-tests comparing appearance frequencies of haunted agents/sites and storytelling in the 2018 and Taisho-era materials.

大項目	個別項目	大正 (n=72)	現代 (n=280)	p 値
語り手の話法	実体験	215.500	166.471	0.000
	伝聞	108.222	194.057	0.000
怪異の特性	可視性	243.056	159.386	0.000
	性別の視認性	201.167	170.157	0.007
	変化	204.667	169.257	0.000
	相互作用	274.167	151.386	0.000
怪異の類型	幽霊	138.444	186.286	0.000
	妖怪	223.000	164.543	0.000
	動物霊	214.889	166.629	0.000
	神	186.222	174.000	0.000
	異人	177.333	176.286	0.811
	火の玉・首	221.056	165.043	0.000
	その他の怪異	185.611	174.157	0.281
場所の特性	公園	166.444	179.086	0.035
	ダム	171.500	177.786	0.104
	トンネル（隧道）	140.000	185.886	0.000
	野山	200.111	170.429	0.000
	水辺（海辺含む）	191.444	172.657	0.000
	寺社・火葬場・墓地	194.111	171.971	0.004
	道路	184.500	174.443	0.111
	橋	173.944	177.157	0.406
	田圃	178.444	176.000	0.049
	城址	170.500	178.043	0.074
	建物（可住）	201.000	170.200	0.000
	建物（空家・廃屋）	147.000	184.086	0.000
エピソードの特性	死亡	157.889	181.286	0.039
	行方不明	169.944	178.186	0.108
	場所性	177.944	176.129	0.817

について有意差を検討したものである。いずれも大正側のほうが有意に高い値を示していることから、現代の怪異は大正時代に比べ視覚的に見えにくく、性別も判別しにくく、受け手の側から働きかけることも少なく、もっぱら受動的に恐れるだけの存在になったものと考えられる。

可視的な怪異の種類について検討した「怪異の類型」では、ほぼ全ての項目で大正側の値が有意に高かった。大正時代の怪異は見えやすいだけでなく、見える種類も豊富であったといえる。現代群の値が有意に高かったのは「幽霊」だけであった。このことから、現代の目に見える怪異は画一化され、人の形をした怪異しか畏怖の対象になっていないことがうかがえる。

怪異は、不可思議さや畏怖の念を喚起する主体に

よって生み出されるものの、エピソードにおける主体の存在は必須の条件ではない。超心理学的な研究が物語るように、真正性の高いエピソードやそれらしい舞台装置が備わっていれば、主体の存在がなくとも心霊スポットは成立することが可能である。そこで「場所の特性」では、怪異にまつわる場所を土地利用種目別に分類した上で、その有無をダミー変数化し、U検定により有意差を検討した。同じく、その場所が怖いとされる理由についても、過去の死亡者や行方不明者および場所そのものの来歴をエピソードから抽出し、U検定による有意差検定を行った。

大正群の値が卓越したのは野山や水辺、田圃のほか、火葬場や墓地、寺社など死にまつわる祭祀が行われる場所である。一方で、人に使われている建物についても、大正群の値が高い結果となっていることには注意が必要で、同じ建物でも空き家や廃墟のように居住実態のないものになると、逆に現代群の値が有意に高く、公園やトンネルでも同様の傾向がみられる。

火葬場や墓地などの忌諱施設は、現代人の感覚では生活環境から隔離されそうにも思える。しかし、当時一般的であった野天での火葬の場合、火葬を終えるのに少なくとも一晩はかかり、焼骨と拾骨のために二度遺族が集合しなければならないことから、寺や墓地、火葬場は集落の周縁部に設けられていたとされる（鯖田1990）。『越中怪談紀行』にも、村はずれの火葬場で貉の化けた美人に遭遇する四方屋勘助という男の話が収められていた。先の空間解析結果も示すとおり、大正時代にはこれら忌諱施設が日常生活圏に近接していたものと考えられる。

一方、現代群に卓越するトンネルや廃墟の多くは山間部に点在する施設であり、すでに述べたGISの空間解析結果を補強する結果が得られた。公園の値が高いのは、公園が明治期の外国人居留遊園（1868年）を濫觴とする新しい土地利用形態で、特に一般的な街区・近隣公園は「都市公園法」（1956年）まで存在していないことが関係していると思われ、これを除くと現代の怪異は日常生活環境からはやや距離を置いたところに出没しやすいと要約できる。

そこで、(1) デジタル標高モデルを用いて、大正群および現代群の点データのZ値（標高値）を取得したものと、(2) 国土数値情報の「森林地帯」ポリゴンデー

タを取得し、大正群と現代群の点データが森林地帯に含まれるかどうかでダミー変数化したものの2つのデータを作成し、Welch検定により2群の平均値の差を検定したところ、出没地点の標高分布には有意差が検出されなかった（ $t=1.5889, p=0.115$ ）。その一方、出没地点が森林地帯に含まれるかどうかについては、2群の間に有意差が検出され（ $t=5.5712, p=0.000$ ）、現代の心霊スポットは大正時代に比べて有意に高確率で森林地帯の中に存在することが裏づけられた。

2. 考察

イギリスの社会学者ジェフリー・ゴラーは、直近に近親者の死を経験した359人の遺族に対するインタビューをもとに、「死のボルノグラフィ化」という概念を提唱した。過去200年の間に、人間の基本経験をなす3要素（誕生、交接、死）のうち誕生と交接がタブーから解放され口にできるようになったのに対し、死は自然死と横死（事故や戦争にまつわる劇的な死）に分離され、後者は小説や劇画でよりセンセショナルに扱われるようになる一方、前者は肉体の腐敗をもたらしものとして隠蔽され、目を背けられ、ぎこちなくも「取り澄ました態度」で接するものへと変容したというのである（ゴラー1986）。

ゴラーのこの説を世に知らしめた功労者の一人がフランスの歴史学者フィリップ・アリエスであった。アリエスは、病院や葬儀、死に対する日常会話を分析し、それらの中にタブーとしての死の根拠を多数見出した。人は死を迎えるとき病院へと隔離され、医療関係者も当人が死ぬことを公然の秘密として扱う。当人は見舞客の前では元気を装い、孤独のうちに自らの死と向き合って最期を迎えなければならない。火葬やエンバーミング技術の発達で遺体は最後の瞬間まで腐敗から遠ざけられ、故人を遺族が語るときも「遠い国へ行った」「お星様になった」というような婉曲表現で語られる出来事になった。彼はそうした死のタブー化が欧米では第一次世界大戦の前後に進行したことを明らかにしている（アリエス1985）。

本研究で明らかになった結果が物語るのは、死がタブー視され現代人の生活から退けられた結果、死と生の境界領域にいる怪異もまたリアリティを失って、我々の日常生活圏から退きつつあるということであ

る。怪異のほとんどが実体を失って見えにくくなり、個性を喪失して人と同じ容姿（幽霊）に画一化され、コミュニケーションも成立しない曖昧な存在になったことを示す本研究の結果は、ゴーラーやアリエスの指摘を踏まえて読み解くと首肯できる点が多い。

妖怪が高度成長期に姿を消していったのに対し、幽霊だけが生き残り、バーチャルな世界にも生息域を広げているとの指摘は、高知市の事例をもとにした高岡（2016）でもなされている。本研究は、定量的なデータでこれを裏付けるとともに、見えない怪異を定量的に可視化し分析するための方法論を提示した。空間解析の結果が示すように、怪異を引き起こす主体は全体としてその領域を平野部から山間部へと後退させている。こちらから意識的に向き合おうとしなければ邂逅することのない存在になった怪異は、山間地のトンネルや廃屋など、肝試し以外では行くことのない場所でのみ体験可能な存在になっていったと考えられる。いわば現代人にとっての怪異は「出くわす」から「出かける」対象へと変容したのであり、妖怪との比較級において幽霊が生息域を広げているとの高岡の解釈は、怪異が人の日常生活圏から隔離されていくより大きな傾向の中で捉えるのが至当であろう⁴⁾。リアルな生活圏から退く一方、怪異はお化け屋敷やビジュアル作品（ゲゲゲの鬼太郎やもののけ姫、リングなど）の中ではなお現役であり続けている。これも、怪異が生活世界を共有するリアルな存在から分離され、ファンタジーの文脈において存在を許される「疎外された娯楽」になったことを物語っているように思われる。

V おわりに

統計数理研究所の林知己夫を中心とする研究グループは1970年代から日本人の意識の基底構造を把握する一環で通称「お化け調査」を続けている。この調査が興味深いのは、単なる「存在する・しない」「信じる・信じない」以外に、「気になる・ならない」「いてほしい・ほしくない」「こわい・こわくない」「おもしろい・つまらない」などの多様な刺激子をおき、中間選択肢に「存在するかも知れない」を設定するなどして、人々が怪異全般に抱く曖昧な意識構造を多次元的に把握しようとしている点にある（朴・吉野2015）。

調査で最も多い回答が「いない・ない・ばかばかしい」であったにもかかわらず「気になる」という意識構造が得られ、20年の間においてもこのパターンは変化がなかったという。この「科学的には単純に信じるというのではないが、それでもなおかつ気になる、否定しがたい感情」（朴・吉野 2015: 167）が怪異に対する日本人の意識の基底にあるという説明は、オカルト番組を笑う一方で葬式から帰った家人に塩を播く現代人の感覚を巧みに言い当てている。本研究は、怪異の生活圏からの撤退傾向と、主体としての多様性や個性の喪失の2点から、林らが示した怪異に対する曖昧な意識構造を地理学的に可視化する方法論を提示した。結びに代えて、本研究を通じて明らかになった課題を記しておきたい。

本研究で試みた方法には幾つかの課題が残されている。第一の課題は、怪異の出没地点の位置情報が必ずしも点的に特定できるとは限らないことである。神通川で漁をしていた人が、雲間から伸びた巨大な手に引きずられていく女性をみたという大正時代のエピソード「鬼に掴まれた女」では、総延長120 kmに及ぶ当該河川のどこの話なのかを特定できず、空間解析の対象から外さざるをえなかった。本研究でこうした例はほとんどみられなかったものの、今後GISを用いた口承の空間解析を進める際に、位置情報の精度にまつわる制約は議論されるべき課題のひとつになろう。

二つ目の課題は、本研究のように過去と現在を比較する方法をとる場合、特に過去の口承を取得できる情報源が極めて限られ、それが現代とは異なる媒体に異なる方針のもとで書かれていることである。本研究でも、2社の編集者によって集成された連載記事を再編した書籍と、ポータルサイトや投稿型掲示板に会話形式で気軽に投稿された口コミ情報を比較するという方法論をとらざるを得ず、異なる媒体に異なる採録基準で書かれたものを比較したことが、見かけ上の差異に影響しているのではないかと疑念を完全には払拭できなかった。同様に、見かけ上の分布傾向の違いが、記述主体の所在地の影響を受けている可能性も否定できなかった。実際、大正と現代の心霊スポットにみられる分布傾向の差異は図1の西側では明瞭である一方、東側ではそれほど明瞭でない。出版社である高岡新報社は高岡市内に本拠を置いていたため、県東部の

怪異を収集せず（ないし出来ず）、これが結果に影響した可能性がある。過去との比較という方法をとる限り、こうした資料の制約にまつわる限界は検討されるべき課題となろう。

第三の課題は、本研究が採用した二点比較の手法によって、その二点を貫いて残り続ける怪異に関する知見を検討できなかったことである。既に述べた通り、これまでの怪異研究の多くは分類学を志向するがゆえに怪異の地理学的側面を等閑視し、時系列で怪異の生成流転の過程をみようとする意識も乏しかった。これとは対照的に、発生学的な関心に基づく都市伝説の研究では、噂から都市伝説になる過程で、次第に脱地域化や派生型の形成がなされていくことが指摘されている（施 2012）。中国生まれの河童の変遷を捉えた日中の研究が物語るように、民話のそれに近い位置づけにある妖怪たちも、発生学的視点に立てば都市伝説のそれと類同的な伝播過程を経て定着していったものと考えられる。

今回の調査でも数こそごく少ないものの、佐々成政の愛妾だった早百合姫にまつわる「早百合の亡霊」（大正群）と「磯部の一本榎」（現代群）のように、大正と現代の2つの時代を通じて残り続ける怪異がみられた。また、エピソードの内容こそ違え地理的に近い場所が別の怪異譚に転用されている例も若干みられた。お岩さん（四谷怪談）や天神様（菅原道真）のように、近代以前に表象化され現代も信仰を集め続ける怪異は存在している。近隣の噂から地域で共有される都市伝説へと発展し、やがて脱地域化して広く派生型を生み出し消費される口承伝播のプロセスに怪異を位置づけたとき、その中に時代を超えて残り続けるものがあるとすれば、それを定量的に分析する方法論を洗練させていくことによって何らかの法則性を導くことができるかも知れない。こうした説話の伝播・発展プロセスについては、民族叙事詩カレワラとその類話の話型を分析したカルレ・クローンの『歴史・地理学的方法』（Goldberg 1984）や、それを昔話の研究に適用し発展させたThompson（1961）などの蓄積があり、全国的な調査を行うことで怪異譚の発展過程の体系的な理解に結びつく可能性もある。これらについては今後の課題としたい。

謝 辞

本研究の実施にあたり科研費（JP17H00839, JP19K21619）の助成を得、内容の一部は2019年3月の北陸地域政策研究フォーラムおよび日本地理学会春季学術大会（専修大学）において発表した。本研究の構想および遂行に際し、各々の専門的見地から多くの有益なコメントをくださった富山大学人文学部の坪見博之、野澤豊一、藤本武の各先生方に御礼申し上げる。

注

- 1) 怪異とは「超自然の現象を総称する歴史用語」（池田 2016: 201）であり、顕現したその現象が「その時代の解釈体系によって意味づけられ」（一柳 2011: 73）た際の呼称である。用語の成立が9世紀頃からと妖怪や幽霊よりも古く（山田 2013）、超常現象を幅広く含んだ概念であったことから、本論文では都市伝説や怪奇現象、およびその主体（幽霊や妖怪）を包含する一般名詞として分析対象を呼ぶ際に「怪異」を用いる。ただし、怪異のみが広くコンセンサスを得ているわけではなく、主に動物霊との関係の中で提唱されている伊藤（2016）の「異類」や、地理学者の水津（1985）が日本霊異記を念頭に命名した「霊異」など、類似の用語が複数存在することをお断りしておきたい。
- 2) 本論文で整理していない研究領域としては他に、スマトラ島沖地震に伴う津波罹災後の復興過程にあるカオラックやブーケット、ピビ島などのリゾート地で、413人の旅行者に意識調査を実施し、入込み客数の回復を遅延させる要因を怪異に対する忌諱反応の文化的差異から説明したRittichainuwat（2011）や死や災害にまつわる場所への観光行動を扱ったダーク・ツーリズム（Seaton 1996; Stone 2006）関連の観光的な研究、民話に登場する海獣を海洋生物相の復原の手がかりに活用しようとする生物学的研究（Parsons 2004）、美術ないし文学作品における創造物としての怪異を捉えた図像学的研究（e.g. 山本 2018; Brogan 1998; Smith 2010; Owens 2017）、ドラキュラが文学作品となる前の16世紀東欧で起こった吸血鬼騒動をめぐる学説をまとめた森口（2018）の歴史学的研究などがある。

- 3) 黒部市の山中に何者かの隠里があるという大正時代のエピソードや、廃屋に不良やホームレス、暴力団員がいるとする現代のエピソードに出てくる人物を「異人」とした。彼らは赤坂（1985）のいう、秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マンに相当する。
- 4) 柳田以来の伝統である山人論を借りれば、我々と怪異（異人）との境界には植民地支配下の台湾で先住民（蕃人）との境界線として設定された隘勇線に類するものがあり、モータリゼーションの進展がそれを都市近郊の山間地にまで押し広げたと捉えることもできる（山路2010）。

文 献

- 赤坂憲雄 1985.『異人論序説』砂子屋書房。
- アリエス, P. 著, 伊藤 晃・成瀬駒男訳 1985.『死と歴史——西欧中世から近代へ』みすず書房 Aries, P. 1975. *Essais sur l'histoire de la mort en occident*. Paris: Editions du Seuil.
- 飯倉昭平 1993. 中国の人を食う妖怪と日本の山姥——逃走譚にみる両者の対応——. 口承文藝研究 16: 1-12.
- 飯倉義之 2006. 「名付け」と「知識」の妖怪現象——ケサランバサラあるいはテンサラバサラの1970年代. 口承文藝研究 29: 124-137.
- 池田浩貴 2016. 『吾妻鏡』における八幡神使としての鳩への意味付け. 常民文化 39: 146-129.
- 池田 学 2009. 認知症. 高次脳機能研究 29(2): 30-36.
- 石川榮吉・岩田慶治・佐々木高明編 1985.『生と死の人類学』講談社.
- 井上円了 1898.『妖怪学講義録』佐渡教育会.
- 井上円了 1900. 真怪論. 妖怪学雑誌 1: 1-16.
- 一柳廣孝 2009. 心霊としての「幽霊」——近代日本における「霊」言説の変容をめぐって. 物語研究 9: 12-19.
- 一柳廣孝 2011. 怪異への視座. 日本文学 60(12): 72-75.
- 伊藤慎吾編 2016.『妖怪・憑依・擬人化の文化史』笠間書院.
- 魏 泉・張 敦福 2011. 中国都市伝説の个案简析. 民俗研究 2011(2): 195-203.
- 植松公彦 2007. 魯迅『中国小説史略』素描. 藝文研究 93: 48-60.
- 内田忠賢 1990. 江戸人の不思議の場所: その人文主義地理学的考察. 史林 73(6): 917-944.
- 梅原 猛・中西 進編 1996.『霊魂をめぐる日本の深層』角川書店.
- 大塚和夫 1988. 近代における「伝統」. 伊藤幹治・米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』175-203. 小学館.
- 小澤葉菜 2011. 「河童」のイメージの変遷について: 図像資料の分析を中心に. 常民文化 34: 23-46.
- 香川雅信 2003. 遊びの中の妖怪たち——近世後期における妖怪観の転換——. 小松和彦編『日本妖怪学大全』31-64. 小学館.
- 川上善郎 1997.『うわさが走る——情報伝播の社会心理——』サイエンス社.
- 菊池 聡 2017. 中学高校生の疑似科学信奉と科学への態度の関連性. 信州大学人文科学論集 4: 39-52.
- 工藤優花 2016. 死者たちが通う街——タクシードライバーの幽霊現象. 金菱清編『呼び覚まされる霊性の震災学』1-24. 新曜社.
- 江 紹原 1989.『中国礼俗迷信』中国: 渤海湾出版公司.
- ゴッフマン, E. 著, 石黒毅訳 2001.『スティグマの社会学』せりか書房. Goffman, E. 1963. *STIGMA: Notes on the management of spoiled identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall Inc.
- ゴラー, G. 著, 宇都宮輝夫訳 1986.『死と悲しみの社会学』. ヨルダン社. Gorer, G. 1965. *Death, grief, and meaning in contemporary Britain*. New York: Doubleday.
- 小松和彦 1990. 妖怪の原像. 岩井宏実監修, 近藤雅樹編『図説日本の妖怪』18-27. 河出書房新社.
- 小松和彦 2006.『妖怪文化入門』せりか書房.
- 子安加余子 2006. 中国知識人と民俗学に関する一考察: 江紹原の迷信研究. お茶の水女子大学中国文学会報 25: 144-128.
- 齊藤泰雄 2012. 識字能力・識字率の歴史的推移——日本の経験. 国際教育協力論集 15(1): 51-62.
- 佐々木高弘 2011. 妖怪の出現する場所. 小松和彦編著『妖怪学の基礎知識』141-168. 角川学芸出版.
- 鯖田豊之 1990.『火葬の文化』新潮社.
- 施 愛東 2012. 盗腎伝説, 割腎謠言と守國叙事. 华南师范大学学报: 社会科学版 2012(6): 5-20.
- 江 紹原 1989.『中国礼俗迷信』中国: 渤海湾出版公司.
- 重信幸彦 2013. 「都市伝説」という憂鬱. 口承文藝研究 36: 103-113.
- 水津一朗 1985. 中世の説話と地理学——位相地理学の一つのころみ——. 人文地理 37(1): 57-74.
- 鈴木由加里 2010. アンリ・ベルクソンと井上円了: 心霊主義をめぐる. 井上円了センター年報 19: 57-79.
- 高岡新報編 2015.『越中怪談紀行』桂書房.
- 高岡弘幸 2004. 幽霊研究序説——高知市異界マップから. 四国民俗 36/37: 30-48.
- 高岡弘幸 2016.『幽霊: 近世都市が生み出した化物』吉川弘文館.
- 高橋庸一郎 1999. 漢民族と志怪. 阪南論集人文・自然科学編 35(2): 1-8.
- 千葉徳爾 1963. 地理学と日本民俗学との接点. 人文地理 15(3): 292-305.
- 土居 浩 1996. 場所と物語——京都の罪人引き廻し伝

- 承を事例として——. 人文地理 48(4): 78–87.
- 中尾麻伊 2019. 『科学者と魔法使いの弟子——科学と非科学の境界』 青土社.
- 長山靖生 2005. 『千里眼事件: 科学とオカルトの明治日本』 平凡社.
- 野澤秀樹 2009. 柳田國男と小田内通敏: 「郷土研究」をめぐって. 放送大学研究年報 26: 127–142.
- 朴 堯星・吉野諒三 2015. 「お化け調査」が浮き彫りにする人々の意識の基底構造——アジア・太平洋国際価値観調査 (APVS) の関連データの概説——. 統計数理 63(1): 163–195.
- 橋内 武 2011. 『遠野物語』の成立とその百年. 桃山学院大学社会学論集 44(2): 337–352.
- 廣田龍平 2016. カッパはポセイドンである——近世後期における東西妖怪比較試論. 世間話研究 24: 20–66.
- 黄 景春 2014. 都市伝説中的文化記憶及其意義构建——以上海龙柱传说为例. 民族艺术 2014(6): 111–117.
- フォスター, M. 2003. 「私, きれい?」——女性週刊誌に見られる「口裂け女」——. 小松和彦編『日本妖怪学大全』635–667. 小学館.
- 福西大輔 2019. 現代における橋の怪異と地域社会に関する一考察. ——人口流出に伴う「心霊スポット」の発生——. 熊本大学社会文化研究 17: 277–289.
- ブルンヴァン, J. H., 大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦訳 1988. 『消えるヒッチハイカー: 都市の想像力のアメリカ』 新宿書房. Brunvand, J. H. 1981. The vanishing hitchhiker: American urban legends and their meanings. New York, US: W.W.Norton.
- ブルンヴァン, J. H., 行方均訳 1990. 『チョーキング・ドーベルマン: アメリカの「新しい」都市伝説』 新宿書房. Brunvand, J. H. 1984. The choking Doberman and other “new” urban legends. New York, US: W.W. Norton.
- 増子和男 2009. 癩怪譚の衰をめぐって (上). 中国詩文論叢 28: 181–193.
- 増子和男 2010. 癩怪譚の衰をめぐって (中). 中国詩文論叢 29: 113–121.
- 増子和男 2011. 癩怪譚の衰をめぐって (下). 中国詩文論叢 30: 155–163.
- 松井幸一・高橋誠一 2011. 聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識: 奄美大島龍郷町を事例として. 関西大学東西学術研究所紀要 44: 243–272.
- 三井寛文 2012. 文化現象としての疑似科学考察. 常民文化 35: 1–28.
- 宮田 登 2001. 『都市空間の怪異』 角川書店.
- 村田尚生・渡辺貴介 1992. 異界の要素からみた江戸のまちの空間的構造に関する研究. 日本都市計画学会学術研究論文集 27: 25–30.
- モラン, E., 杉山光信訳 1980. 『オルレアンのうわさ: 女性誘拐の噂とその神話作用』 みすず書房. Morin, E. 1969. *La rumeur d'Orléans*. Paris, France: Editions du Seuil.
- 森口大地 2018. ヴァンパイアはなぜ腐らないのか——ヴァンパイアをめぐる1730年代ドイツ語圏の学説——. 京都大学大学院独文研究室研究報告 31: 1–22.
- 柳田國男・佐々木鏡石 1910. 『遠野物語』. 日本近代文学館.
- 山田雄司 2013. 室町時代の災害と伊勢神宮. 史林 96(1): 42–70.
- 山本聡美 2018. 『闇の日本美術』 筑摩書房.
- 横山泰子 2004. 妖怪と比較文化研究——轆轤首を事例に. ICU比較文化 36: 121–123.
- 李 福清 2001. 『神话与鬼话: 台湾原住民神话故事比较研究』 增订本 (文学人类学论丛) 北京: 社会科学文献出版社.
- 若杉亮平 2014. 図書館における疑似科学的資料の扱いについて. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 7: 289–299.
- 王 青 2013. 蔡元培と井上円了における宗教思想の比較研究. 国際井上円了研究 1: 118–129.
- 王 鑫 2015. 比較視域下的中日“妖怪”与“妖怪学”研究. 北京外国语大学2015年度博士学位论文.
- 山路勝彦 2010. 南庄事件と〈先住民〉問題: 植民地台湾と土地権の帰趨. 関西学院大学社会学部紀要 109: 23–50.
- 魯 迅 2014 [1923/1924]. 『中国小説史略』『鲁迅全集第九卷』 同心出版社.
- Aciksoz, S. C. 2015. Ghosts within: A Genealogy of War Trauma in Turkey. *Journal of the Ottoman and Turkish Studies Association* 2(2): 259–280.
- Anthony, S. and Gibbins, S. 1995. Believability and importance as determinants of rumor among deaf college students. *American Annals of the Deaf* 140(3): 271–278.
- Beattie, J. H. 1964. The ghost cult in Bunyoro. *Ethnology* 3(2): 127–151.
- Bering, J. M. 2006. The cognitive psychology of belief in the supernatural. *American Scientist* 94(2): 142–149.
- Blacker, C. 2002. The mistress of animals in Japan: Yamanokami. In *The Concept of the Goddess 1st ed*, eds. S. Billington and M. Green, 178–185. UK, Routledge.
- Blanke, O., Pozeg, P., Hara, M., Heydrich, L., Serino, A., Yamamoto, A., Higuchi, T., Salomon, R., Seeck, M., Landis, T., Arzy, S., Herbelin, B., Bleuler, H., and Rognini, G. 2014. Neurological and robot-controlled induction of an apparition. *Current Biology* 24: 2681–2686.
- Brogan, K. 1998. *Cultural haunting: Ghosts and ethnicity in recent American literature*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Brugger, P. and Mohr, C. 2008. The paranormal mind: How the study of anomalous experiences and beliefs may inform cognitive neuroscience. *Cortex* 44(10): 1291–1298.
- Clarke, P. A. 2007. Indigenous spirit and ghost folklore of “settled” Australia. *Folklore* 118: 141–161.
- Douglas, M. 1966. *Purity and danger: An analysis of the concepts of pollution and taboo*. London, UK: Routledge & Kegan Paul.

- Eberly, S. S. 1988. Fairies and the folklore of disability: Changeling, hybrids and the solitary fairy. *Folklore* 99(1): 58–77.
- Evans-Pritchard, E. E. 1950. Ghostly vengeance among the Luo of Kenya. *Man* 50: 86–87.
- Gluckmann, M. 1937. Mortuary customs and the belief in survival after death among the South-Eastern Bantu. *Bantu Studies* 11(1): 117–136.
- Goldberg, G. 1984. The Historic-Geographic Method: Past and Future. *Journal of Folklore Research* 21(1): 1–18.
- Granovetter, M. S. 1973. The strength of weak ties. *American Journal of Sociology* 6: 1360–1380.
- Guggenheim, B. and Guggenheim, J. 1995. *Hello from Heaven!: A new field of research, after-death communication, confirms that life and love are eternal*. NY: Bantam Books.
- Hajduk-Nijakowska, J. 2015. Towards the new folklore genre theory. *Slovensky Narodopis* 63(2): 161–173.
- Holloway, J. 2010. Legend-tripping in spooky spaces: ghost tourism and infrastructures of enchantment. *Environment and Planning D: Society and Space* 28(4): 618–637.
- Houran, J., Wiseman, R., and Thalbourne, M. 2002. Perceptual-personality characteristics associated with naturalistic haunt experiences. *European Journal of Parapsychology* 17: 17–44.
- Inglis, D. and Holmes, M. 2003. Highland and other haunts: Ghosts in Scottish tourism. *Annals of Tourism Research* 30(1): 50–63.
- Knapp, R. H. 1944. A Psychology of rumor. *Public Opinion Quarterly* 8(1): 22–37.
- Kimmel, A. J. and Keefer, R. 1991. Psychological correlates of the transmission and acceptance of rumors about AIDS. *Journal of Applied Social Psychology* 21(19): 1608–1628.
- Kokubo, H. and Kasahara, T. 2000. Japanese studies for anomalous phenomena in the 1990s. *International Journal of Parapsychology* 11(2): 35–61.
- Kwilecki, S. 2009. Twenty-first-century American ghosts: The after-death communication—Therapy and revelation from beyond the grave. *Religion and American Culture* 19(1): 101–133.
- Kwilecki, S. 2011. Ghosts, meaning, and faith: After-death communications in bereavement narratives. *Death Studies* 35(3): 219–243.
- Jalal, B. 2016. How to make the ghosts in my bedroom disappear? Focused-attention meditation combined with muscle relaxation (MR therapy)—a direct treatment intervention for sleep paralysis. *Frontiers in Psychology* 7: 1–6.
- James R. M. 1992. Knockers, knackers, and ghosts: Immigrant folklore in the Western mines. *Western Folklore* 51: 153–177.
- Lange, R. and Houran, J. 1996. Hauntings and poltergeist-like episodes as a confluence of conventional phenomena: A general hypothesis. *Perceptual and Motor Skills* 83(3): 1307–1316.
- Lange, R. and Houran, J. 1997. Context-induced paranormal experiences: Support for Houran and Lange's Model of haunting phenomena. *Perceptual and Motor Skills* 84(3): 1455–1458.
- Leach, E. R. 1964. Anthropological aspects of language: Animal categories and verbal abuse. In *New directions in the study of language*. ed. E.H. Lenneberg, 23–63. Cambridge, MA: MIT press.
- Lieberman, A. F. 2007. Ghosts and angels: Intergenerational patterns in the transmission and treatment of the traumatic sequelae of domestic violence. *Infant Mental Health Journal* 28(4): 422–439.
- Light, D. 2009. Performing Transylvania: tourism, fantasy and play in a luminal place. *Tourist Studies* 9(3): 240–258.
- Loch, S. C. and Nzekwe, B. 2011. Creatures in the classroom: Preservice teacher beliefs about fantastic beasts, magic, extraterrestrials, evolution and creationism. *Science & Education* 20: 473–489.
- MacCannell, D. 1976. *The tourist: a new theory of the leisure class*. NY: Schocken Books Inc.
- McHarg J. F. 1973. Poltergeist and apparitional haunting phenomena affecting the family and associates of an adolescent girl with well-controlled epilepsy. In *Research in parapsychology*. eds. W.G. Roll, R.L. Morris and J.D. Morris, 17–19. Metuchen, NJ: Scarecrow Press.
- Nees, M. A. and Phillips, C. 2015. Auditory pareidolia: Effects of contextual priming on perceptions of purportedly paranormal and ambiguous auditory stimuli. *Applied Cognitive Psychology* 29(1): 129–134.
- Nickell, J. 2001. Phantoms, frauds, or fantasies. In *Hauntings and poltergeists: Multidisciplinary perspectives*. eds. J. Houran and R. Lange., 214–223. Jefferson, NC: McFarland & Company.
- Ostermiller, J. 2017. Transcendent pandemonium: Reconnecting (the Americanization of) Yōkai Watch with its roots in Japanese folklore. *Proceedings of the Southern Anthropological Association* 11: 92–99.
- Owens, S. 2017. *The ghost: A cultural history*. London, UK: Tate Publishing.
- Parsons, E. C. M. 2004. Sea monsters and mermaids in Scottish folklore: Can these tales give us information on the historic occurrence of marine animals in Scotland? *Anthrozoös* 17(1): 73–80.
- Pezzo, M. V. and Beckstead, J. W. 2006. A multilevel analysis of rumor transmission: Effects of anxiety and belief in two field experiments. *Basic and Applied Social Psychology* 28(1): 91–100.
- Poole, W. S. 2011. *Monsters in America: Our historical obsession with the hideous and the haunting*. Waco, TX: Baylor University Press.
- Ramos, M. D. 1990. *The Aswang complex in the Philippine folklore*. Manila: Phoenix Publishing House.
- Riekk, T., Lindeman, M., Aleneff, M., Halme, A. and Nu-

- ortimo, A. 2012. Paranormal and religious believers are more prone to illusory face perception than skeptics and non-believers. *Applied Cognitive Psychology* 27(2): 150–155.
- Rittichainuwat, B. 2011. Ghosts: A travel barrier to tourism recovery. *Annals of Tourism Research* 38(2): 437–459.
- Robbins, J. 1998. Christianity and desire among the Urapmin of Papua New Guinea. *Ethnology* 37(4): 299–316.
- Roll, W. G. and Persinger, M. A. 2001. Investigations of poltergeists and haunts: A review and interpretation. In *Hauntings and poltergeists: Multidisciplinary perspectives 1972*. eds. J. Houran and R. Lange, 123–163. Jefferson, NC: McFarland & Company.
- Rosnow, R. L. 1988. Rumor as communication: A contextualist approach. *Journal of Communication* 38(1): 12–28.
- Rosnow, R. L. 1991. Inside rumor: A personal journey. *American Psychologist* 46(5): 484–496.
- Schachter, S. and Burdick, H. 1955. A field experiment on rumor transmission and distortion. *The Journal of Abnormal and Social Psychology* 50(3): 363–371.
- Showalter, E. 1997. *Hystories: Hysterical epidemics and modern media*. New York: Columbia University Press.
- Seaton, A. V. 1996. Guided by the dark: From thanatopsis to thanatourism. *International Journal of Heritage Studies* 2(4): 234–244.
- Smith, A. 2010. *The ghost story, 1840–1920: A cultural history*. Manchester, UK: Manchester University Press.
- Stone, P. 2006. A dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism: An Interdisciplinary International Journal* 54(2): 145–160.
- Tandy, V. 2000. Something in the cellar. *Journal-Society for Psychical Research* 64: 129–140.
- Thompson, R. C. 2010. “Am I going to see a ghost tonight?": Gettysburg Ghost Tours and the performance of belief. *The Journal of American Culture* 33(2): 79–91.
- Thompson, S. 1961. *The types of the folktale: a classification and bibliography: Antti Aarne's Verzeichnis der Märchentypen (FF Communications No. 3)*. Helsinki: Suomalainen Tiedekatemia.
- Walker, C. J. and Blaine, B. 1991. The virulence of dread rumors: A field experiment. *Language & Communication* 11(4): 291–297.
- Walton, M. T., Fineman, R. M. and Walton, P. J. 1993. Of monsters and prodigies: The interpretation of birth defects in the sixteenth century. *American Journal of Medical Genetics* 47: 7–13.
- Wiseman, R., Watt, C., Stevens, P., Greening, E. and O'Keeffe, C. 2003. An investigation into alleged 'hauntings'. *British Journal of Psychology* 94(2): 195–211.
- Wittkower, R. 1942. Marvels of the east: A study in the history of monsters. *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 5: 159–197.
- Zehner, E. 2005. Orthodox hybridities: Anti-syncretism and localization in the evangelical Christianity of Thailand. *Anthropological Quarterly* 78(3): 585–617.

〈著者略歴〉

鈴木晃志郎（すずき こうしろう）

1972年福岡県生まれ。東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了，博士（理学）。UCSB客員研究員などを経て，現在 富山大学人文学部准教授。認知地図や景観紛争に関する研究のほか，近年は地理情報倫理に関心を広げている。主な論文 Suzuki, K. 2019. #Purge: Geovigilantism and geographic information ethics for connective action. *GeoJournal* (in press). doi: 10.1007/s10708-019-10081-7

公式ホームページ <https://researchmap.jp/read0192169/>

于 燕楠（う えんなん）

1994年中国河北省生まれ。遼寧大学外国語学部卒業。現在 富山大学大学院文学研究科修士課程在学中。